「教育実習体験レポート」

[公立中学校　英語]

教育実習を終えて

3 週間の中学校での教育実習を終えて、真っ先に感じることは教師という仕事には想像を遥かに超える大変さがあるものの、楽しさがあるということである。実習に行くまでは、本当に自分が子どもたちに教えることができるのか、実習を無事に終えられるのかとても不安であり、授業準備や担任業務など大変なことも数えきれないほどあったが、実習を終えた今、教師という職業により強い憧れを抱き、改めて自分自身も現場の先生方のような存在になりたいとより強く思うようになった。

実習が始まり、1 週間目までは、これから 3 週間やっていけるのかという不安や緊張、また生徒とどのように関われば良いのか分からなかったため、英語だけではなく、他の教科の授業や担当する1年生だけでなく、他の学年の授業見学を積極的に行うことで子どもたちの様子を観察したり、ホームルームや給食、清掃の開始時間よりも早く教室に行き、できるだけ子どもたちとの関わりの時間を増やすよう心がけた。そうすることで、最初はあまり反応が良くなかった生徒も徐々にコミュニケーションを取れるようになり、生徒自ら話しかけてくれるようになった。実際に授業見学をさせていただいた時の生徒の様子や印象とは異なり、休み時間など授業以外ではその時とは違う様子であったと感じる。このことから、生徒の様子や小さな異変に気づくためには、授業だけではなく、普段の小さな何気ないコミュニケーションがより大切になってくるのではないかと感じた。実際に指導教官の先生も、子どもたちの様子を知るために、職員会議や終わったらすぐ教室に向かい、生徒とあいさつや会話を通して、その日の生徒の様子を知るようにしているそうだ。

次に授業実践について述べていく。1 年生と 3 年生の授業を行い、2 年生は補助として授業に参加させていただいた。現状として、自分自身が生徒であった頃の紙ベースで文法や本文を訳してそれらの説明を聞くという授業ではなく、生徒一人ひとりに個人の iPad が配布されていたり、デジタル教科書を使用した、より動きのある授業が行われていた。そのような機器を活用した授業の経験があまりないため、授業する前の見学では、どのように授業の中で活用されているのかに焦点を当て、そこで気づいたことを取り入れながら、生徒の興味関心や理解につなげるにはどのような工夫が必要なのかを考えながら、授業を行うようにした。具体的には、学んだことをよりすぐに楽しんで実践できるように、授業の中で話すことに特化したペアワークや書くことに焦点を当てたグループワークなどを行なった。また、授業をしていく中で特に学んだこととしてあげられるのは、教師の発話をできるだけ少なくするということである。授業をする前までは、必要な知識をできる限り教えなければならないと考えていたが、実際には教師が必要以上に話すことで、生徒の貴重なアウトプットの時間を奪っているということに繋がるということを改めて実感した。

次に学校行事や部活動について述べていく。実習期間中には、防災講演会や体育大会、文化発表会の準備に参加させていただいた。準備や会議を通して、多くの先生の力があってこそ、生徒が中心となって、より円滑にそれぞれの行事を運営することができているのだと実感した。部活動に参加して感じたことは、教師の負担の多さである。実際に帰りのホームルームが終わり、部活動に行き、終了してから準備をすることがほとんどであった。普段の教室での様子とは異なり、部活動をす

る生徒はまた違う表情を見せていたり、できなかったことができるようになっている様子を共に感じられることに魅力を感じたが、それとは裏腹に教師の負担も大きいのではないかと改めて実際に現場を経験することでそう感じた。

３週間を振り返り、つらいと感じることもあったが、それ以上にこの実習を通して、「教師」という仕事に対して改めてやりがいを感じた。この３週間で経験したことは、ほんの一部に過ぎないかもしれないが、私の人生で忘れられない３週間となったと感じる。